

「中風の人 2」

マルコの福音書 2:5~9

はじめに

イエシュアのみもとに四人の人がやって来ました。彼らはひとりの中風を患った病人を担いでいました。しかしイエシュアがおられた家はすでに戸口まで群衆で埋め尽くされ入ることができなかったために、四人は中風の人を担いで家の屋上に上がり、屋根をはがして穴を開け、そしてイエシュアのおられる場所に中風の人を寝床ごとつり降ろしたのです。前回のメッセージで、この中風的人是イスラエルの民を指し示し、そして四人の人は地の四隅、全世界を指し示しており、この様子はイスラエルの民がイエシュアのみもとに地の四隅から、すなわち世界中から集められるという、以下の預言の成就を指し示したものであると述べました

【新改訳 2017】

イザヤ書

11:12 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

そしてこの預言は、ただ世界中に離散したイスラエルの民が集まって来るというものではなく、イエシュアによって、イエシュアのみもとに集められる、すなわちイエシュアによって成就される預言であることが、この中風の人がイエシュアのみもとに運ばれて来た一連の出来事の中に「型」として表されていると考えられます。ですからイエシュアはこの中風の人をただ単に癒されるだけでなく、以下のよう

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

と言われたのだと考えられます。「あなたの罪は赦された」とありますが、ヘブル語で「罪」はハッタート(תַּאֲוָה)、そして「赦す」はサーラハ(סָלַח)と言います。罪が赦されるという表現が聖書で最初に使われた箇所は、出エジプト記 34:9 です。

【新改訳 2017】

出エジプト記

34:9 彼は言った。「ああ、主よ。もし私がみこころにかなっているのでしたら、どうか主が私たちのただ中にいて、進んでくださいますように。確かに、この民はうなじを固くする民ですが、どうか私たちの咎と罪を赦し、私たちをご自分の所有としてくださいますように。」

これは神がモーセを通してイスラエルの民に十戒とも呼ばれる二枚の石の板に書き記した律法が与えられる場面です。このように「**罪を赦し**」とは本来、「**主が私たちのただ中に**」すなわち神がイスラエルの民とともにおられる、また彼らの心の中におられるということ、そして「**私たちをご自分の所有として**」すなわちイスラエルの民が神の所有、聖なるもの、神のものとなるということを示していると考えられ、以下のようにも預言されています。

【新改訳 2017】

エレミヤ書

31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、**わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す**。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

このように、神がイスラエルの民のただ中におられる、ともにおられるとは、神の「**律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す**。」ということであり、それが神の所有、神のもの、神の民となるということであると言えます。ですからイエシュアはただ中風の人の罪を赦すために「**子よ、あなたの罪は赦された**」と言われたのではなく、そこにイスラエルの民を神の民、ご自分の所有とするという神のご計画を指し示して言われたのだと考えられます。

1. 座る

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:6 **ところが、律法学者が何人かそこに座っていて、心の中であれこれと考えた。**

そしてこの現場に、「**律法学者が何人かそこに座って**」いたことが記されています。「座る」という意味のヘブル語はヤーシャヴ(יָשָׁב)と言いますが、この言葉は本来、神から離れてさすらう、さまようことを指し示していると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

4:16 カインは【主】の前から出て行って、エデンの東、**ノデの地に住んだ**。

これは最初の人アダムの二人の息子である、兄カインと弟アベルの出来事の結末とも言える箇所ですが、兄カインは弟アベルを殺し、「**主の前から出て行って**」、神から離れて行きました。そして「**ノデの地に住んだ**」とありますが、ここで「**住んだ**」と訳されているのが聖書で最初のヤーシャヴです。「**ノデ(נֹדֶד)の地**」と訳されているこの地名は「逃げる、さまよい歩く、嘆く」という意味の動詞ヌード(נָדַד)がその語源です。ですから「**座っていて**」と訳されたヤーシャヴは本来、神から逃げ、さまよい歩くことを指し示していると考えられ、この「**律法学者**」たちが、神の御心、ご計画を拒絶し、そこから

離れていたことが表されていると考えられます。ですから彼らはイエシュアの言動が理解できず、これに対して心の中で次のようにつぶやいたのです。

2. 冒瀆する

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:7 「この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆^{ぼうとく}している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

この律法学者たちが言うように、たしかに「罪を赦す」すなわちイスラエルの民を集め、その心に律法を書き記し、神の所有、神の民とすることができるのは「神おひとり」だけです。しかしその神に全く聞き従い、その権威がイエシュアに与えられていることを彼らは理解していませんでした。それどころか「神を冒瀆^{ぼうとく}している。」と言ってイエシュアを心の中で非難しました。しかし実際に神を冒瀆していたのは、神がイエシュアに罪を赦す権威をお与えになられたことを認めない、神の御心から遠く離れていた、彼ら律法学者たちの方でした。この「冒瀆する」はヘブル語でガーダフ(גָּדַף)と言い、故意に、罪だと解っていないながらもわざと罪を犯すことがその本来の意味であると考えられます。

【新改訳 2017】

民数記

15:30 この国に生まれた者でも、寄留者でも、故意に違反する者は【主】を冒瀆^{ぼうとく}する者であり、その人は自分の民の間から断ち切られる。

律法によると、気づかずに、過失によって犯した罪は、定められたいけにえをささげることで赦されました。しかしこのように「故意に違反する者は【主】を冒瀆^{ぼうとく}する者であり、その人は自分の民の間から断ち切られる。」ことが定められていました。この「民の間から断ち切られる。」とは一般的に言う仲間外れ、のけ者という程度のものではなく、滅ぼされること、すなわち死を意味しています。ですからイエシュアに対して「神を冒瀆^{ぼうとく}している。」と言った律法学者たちは、この時点ですでにイエシュアに対して死を、殺意を抱いていたことが表されていると考えられます。

3. 心を見る

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:8 彼らが心のうちでこのようにあれこれと考えているのを、イエスはすぐにご自分の霊で見抜いて言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを考えているのか。」

イエシュアが神の御心と全く一つであること、神と同じ視点を持っていることがここに示されています。それはすなわち神は「心」を見られるということです。

【新改訳 2017】

I サムエル記

16:7 【主】は…人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。

人の「心を見る」、これが神のご性質のひとつの現れ、象徴です。この「心」のことをヘブル語でレーヴ(לב)と言いますが、その最初の言及、聖書で最初にこの言葉が使われた箇所はまさに神が人の心をご覧になられたことが記されています。

【新改訳 2017】

創世記

6:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。

6:6 それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

6:7 そして【主】は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」

これはノアの箱舟の出来事、全世界を水没させた大洪水による滅びの発端となった箇所ですが、神は人のレーヴ「心…をご覧になった」ことで「人を地の面から消し去ろう」と宣言されました。ですから神が人の「心を見る」という行為には本来、「人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで」を消し去ること、滅びを指し示す意味があると考えられます。

イエシュアを見るために、その御言葉を聞くために群衆の中に座っていた律法学者たち。しかし彼らの「心」は神の御心から遠く離れ、そしてイエシュアを認めないばかりか、殺意を抱くほどに悪に傾いていました。そのような者、すなわちイエシュアを知りながら、この御方を無視し、背を向ける者、拒絶する者に対して神が下すさばきは、ノアの箱舟の大洪水に表される、滅びであることがここに表されていると考えられます。

4. 起きる

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:9 中風の人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。

当時、すべての病は「罪」が原因であると考えられていました。ですからこの中風の人が「起きて、寝床をたたんで歩」くことはその「罪は赦された」という事実の証拠、証明となります。ですから「ど

「**ちらが易しいか**」というイエシュアのこの問いに対する答えは「『**起きて、寝床をたたんで歩け**』と言う」ことよりも、「『**あなたの罪は赦された**』と言う」方が易しいと考えます。つまり「『**起きて、寝床をたたんで歩け**』と言う」ことの方が重要だということです。先に述べたように、「罪を赦す」とは、イスラエルの民の心に律法を書き記し、彼らを神の所有の民とするという神のご計画を指し示した言葉であると考えられます。ではこの「**起きて、寝床をたたんで歩け**」とは一体何を指し示しているのでしょうか。

まず「起きる」ことをヘブル語でクーム(קום)と言いますが、この最初の言及は創世記 4:8 です。

【新改訳 2017】

創世記

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに**襲いかかって**殺した。

これは最初の人アダムの二人の息子、兄のカインと弟のアベルについての記述ですが、兄のカインが弟のアベルに「**襲いかかって**」と訳されているのが聖書で最初のクームです。このように、クームとは本来、自分の兄弟に対して立ち向かい、そして「殺す」ことを指し示しています。イエシュアは中風の人に対してこの言葉を語られましたが、この中風の人イスラエルの民を指し示した「型」であると述べました。ですからイスラエルの民、ユダヤ人たちが兄弟を「殺す」ことを指し示していると考えられます。イエシュアの十字架の死がこれに結びつくと考えられます。先ほど律法学者たちがイエシュアに対して殺意を抱いていたと述べましたが、その事実もこれに結びついてきます。律法によると、「**罪が赦される**」ためには、定められたいけにえをささげる、すなわち「殺す」必要がありました。定められたいけにえを「殺す」ことなしに「**罪が赦される**」ことはあり得なかったということです。このクームという言葉の意味だけでも「『**起きて、寝床をたたんで歩け**』と言う」ことの方が重要であることがわかります。つまりイエシュアの十字架の死によってのみ、「**罪が赦される**」ということが指し示されていると考えられます。

5. 寝床をたたんで

次に「**寝床をたたんで**」という言葉についてですが、ここには「上げる、運ぶ」という意味の動詞ナーサー(נָסַר)が使われています。最初の言及は創世記 4:7 です。

【新改訳 2017】

創世記

4:6 【主】はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。」

4:7 もしあなたが良いことをしているのなら、**受け入れられる**。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」

これもまた最初の人アダムの二人の息子、カインとアベルの出来事です。「受け入れられる」と訳されていることがナーサー本来の意味を指し示しています。それはすなわち「良いこと」、神の目に正しい行いをする者となり、神に「受け入れられる」こと、神の所有、神のものとなるということ、それがナーサー本来の指し示す意味であると考えられます。「罪が赦される」ことは重要なこと、素晴らしいことです。しかしその罪を赦された者が、神に受け入れられる、良い行いをする者となることはもっと重要なこと、素晴らしいことではないでしょうか。なぜなら神に「受け入れられる」「良いこと」をする、行うという目的のために「罪が赦される」と考えられるからです。私たちは普通、良い行いをすれば報われる、神に愛されると考えがちです。しかし人は罪を持った今の状態では、何をどうやっても神に「受け入れられる」、神の基準に達することは不可能です。神に「受け入れられる」にはまず「罪が赦される」必要があるのです。それによって初めて人は神に「受け入れられる」行いをするようになるのです。このように私たちは「罪が赦される」ために神によって造られ、選ばれたではありません。以下のように記されている通りです。

【新改訳 2017】

エペソ人への手紙

2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。

このように「私たちは…良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」ですから『あなたの罪は赦された』と言うことよりも、『起きて、寝床をたたんで（ナーサー）歩け』と言うことの方がより重要であることが指し示されていると考えられます。

しかしこのような解釈は、私たちの視点、思いが今の時代、今という時間を生きる私たちを取り巻く世界に向いては、到底理解できるものではありません。これは神にはご計画があり、それは神が今のこの時代を終わらせ、永遠の「神の国」を建てるということに神の視点、神の御心が向けられているという解釈に基づいているからです。人は「罪が赦される」こと、すなわちイスラエルの民がイエシュアによって集められ、彼らの心に律法が書き記され、神の所有の民となること、私たち異邦人もこのイスラエルに繋がる者として同じ民となり、「神の国」に迎え入れられること、それによって初めて人はナーサー、神に「受け入れられる」良い行いをする者となるということであり、その目的に向かって神は天地創造の前からすべてを導いておられるのだと私は考えます。

6. 歩け

そして最後に「歩け」と言うことについて。ハーフ(הלך)「歩く、行く」という意味の動詞が使われていますが、その本来の意味は少し違うようです。

【新改訳 2017】

創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。

2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとシヨハム石もあった。

2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシルの東を流れていた。第四の川、それはユーフラテスである。

エデンの園から湧き出た「川」、それが「四つ」に分かれ、全地に「流れていた」という記述に聖書で最初のハーラフがあります。これがエデンおよび全地を潤し、そこに生きる動植物を養い、良質の金や宝石までも生み出していたことが記されています。このようにハーラフとは本来、全地とそこに生きるすべてのものの祝福と繁栄をもたらす存在を指し示すような言葉であると考えられます。このように全世界を祝福するために、神がお選びになった一つの存在、それはアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民であると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。

このように「歩く」ハーラフという言葉には、イスラエルの民によって「地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」ことが指し示されていると考えられます。この約束の成就、目的のために神はイスラエルの民を集め、御自分の所有の民となさるのです。ですからこの言葉からもやはり『あなたの罪は赦された』と言うことよりも、『起きて、寝床をたたんで歩け（ハーラフ）』と言うことの方がより重要であることが表されていると考えられます。

7. どちらが易しいか

しかし注意しなければならないことは、『あなたの罪は赦された』と言うことよりも、『起きて、寝床をたたんで歩け（ハーラフ）』と言うことの方がより重要であると言っても、後者こそが重要であり、前者は取るに足らない、必要ではないと言っているわけではありません。たとえるならば前者は通ら

なければならないただ一つの道であり、後者はその道の先にある到着地であるということです。イエシユアはここで「**どちらが易しいか。**」と問われましたが、ここにはカーラル(קלל)という動詞が使われています。その最初の言及は創世記 8:8 です。

【新改訳 2017】

創世記

8:6 四十日の終わりに、ノアは自分の造った箱舟の窓を開き、

8:7 鳥を放った。すると鳥は、水が地の上から乾くまで、出たり戻ったりした。

8:8 またノアは、水が地の面から引いたかどうかを見ようと、鳩を彼のもとから放った。

「水が地の面から引いた」という、ノアの箱舟の大洪水の終わりを指し示す記述にカーラル本来の意味が指し示されています。ノアの箱舟にいたものたちは箱舟から出て、新しい地上に生きるという目的を持っていました。しかしそれには水が地の面からカーラル「引く」ということがなければなりません。このようにカーラルとは本来、絶対に通らなければならない通過点、満たさなければならない条件を指し示す言葉であると考えられます。ですから「**どちらが易しいか。**」と言われたイエシユアは、物事の優劣を問われたのではなく、神のご計画が成就していく、その順序を示されたのだと考えられます。

8. 神の順序

神のご計画を理解する上で特に重要なのがこの順序、順番であると考えます。ある物事が成り立っていく、造り上げられていく過程において、その順序を決めることは必要不可欠です。この順序を決めることこそが計画そのものであると言っていいほどです。誰も建てる場所も決めないで、土台も据えずにいきなり屋根から家を造り始める人はいません。造り上げるものが精巧で緻密なものであればあるほどその順序は重要になってきます。ですから神のご計画を知る、神の国を知るとは、それが成り立っていく順序を知ることであると言えます。つまり「神の国」とはどのようなものか、その完成図を思い描き、憧れるだけではなく、どこから始まり、何を経て、どのような存在、また出来事によって完成に至るのか、その順序を一つひとつ辿るように追っていく、そのような心構え、姿勢を持って聖書に取り組んでいくことが「神の国」を求める上で重要な要素の一つではないかと思われています。聖書に記された神のご計画、その順序を知ることの重要性が今日の箇所には表されているのではないかと感じました。